60393
教科書文庫
6
810
74-1949
20000
67135

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

3a
810
B24

資料室

こくご　三

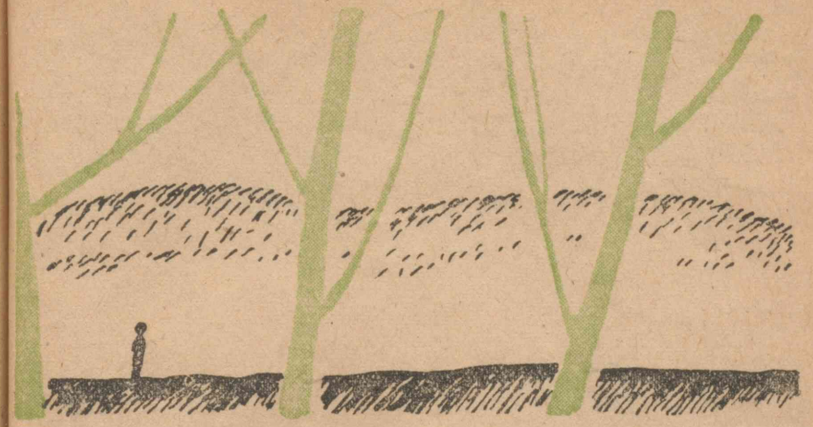
広島大学
教
67135
図書

3ゐ
810
HB24

もくろく

一　春の　声……四
二　花まつり……九
三　ことばあつめ……十八
四　はやとり……二十二
五　学　校……三十
六　かえり道……三十九

七　白うさぎ……四十三
八　高い　高い……四十九
九　五人の　子ども……五十八
十　ひびき……八十五
十一　みんなの　もの……九十
十二　一まいの　紙……九十四
十三　かぐやひめ……百



一　春の声

（一）

まさお　「やあ。」

みんな　「やあ。」

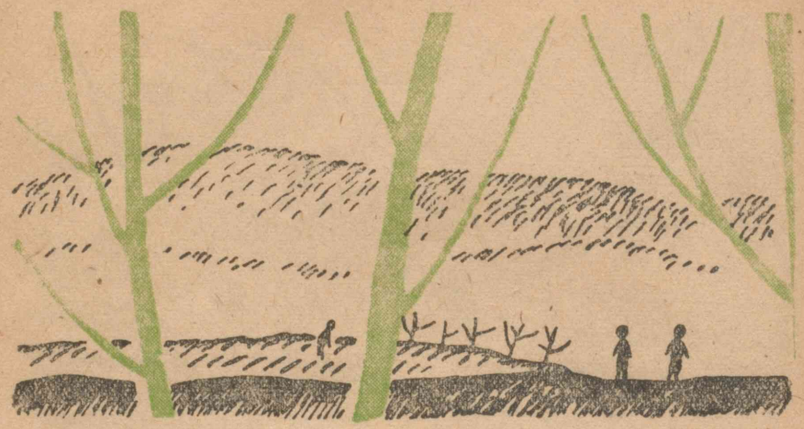
ただし　「山。」

みんな　「山、山。」

まさお　「はねかえる。」

みんな　「はねかえる。」

ただし　「山の　山びこ。」



みんな　「山びこ。おうい、おうい。」

さぶろう　「あかるい　山。」

みんな　「山の　あの　色。」

さぶろう　「あたたかな　かぜ。」

みんな　「かぜの　手ざわり。」

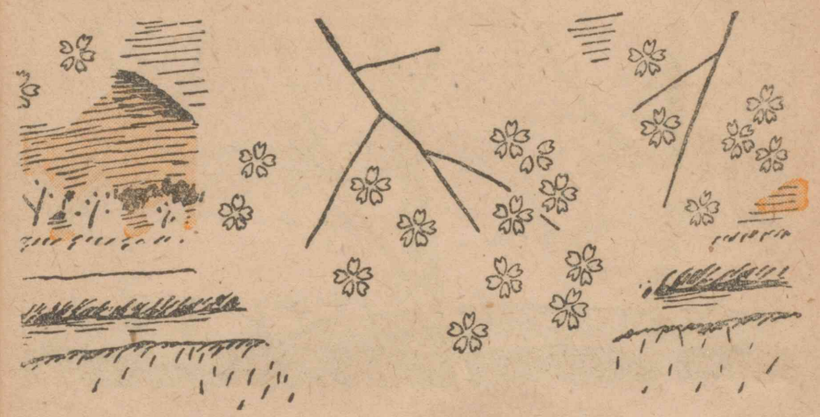
ともお　「ひろい　はたけの　中で。」

さぶろう　「たねまき、たねまき。」

みんな　「たのしい　たねまき。」

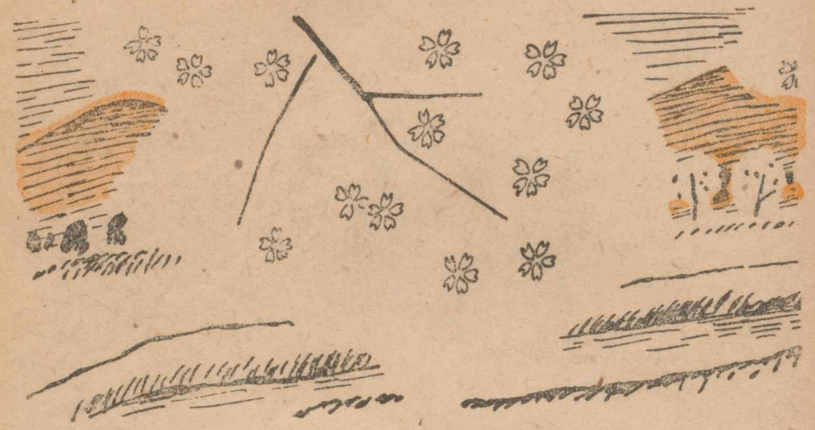
ともお　「ああ、お日さま。」

みんな　「お日さまの　光、光。」



（二）

さちこ　「ほあ。」
みんな　「ほあ。」
ゆりこ　「春。」
みんな　「春、春。」
さちこ　「おきあがる。」
みんな　「おきあがる。」
ゆりこ　「どこも　さくら。」
みんな　「さくら、さくら。」
すみこ　「たなびく　かすみ。」



みんな　「かすみに　なく　ひばり。」
すみこ　「さらさら、さらさらさら。」
みんな　「さらさら、さらさらさら。」
のぶこ　「小川の　ながれ。」
すみこ　「白い　くもの　ながれ。」
みんな　「さらさら、さらさらさら。」

（三）

たつお　「おうい。」
みんな　「おうい、おうい。」
たつお　「みんな　あつまれ。」

みんな「あつまれ。」
いさむ「さあ、手を つなごう。」
みんな「手を つなごう。」
たつお「わに なろう。」
みんな「わに なろう。大きな 大きな わに なれ。」
さきこ「東の 友だち。」
みんな「西の 友だち。」
たけひこ「南の 友だち。」
みんな「北の 友だち。」

二　花まつり

花まつり

すみれ　たんぽぽ　れんげそう、
花の　おやねが　うつくしい。

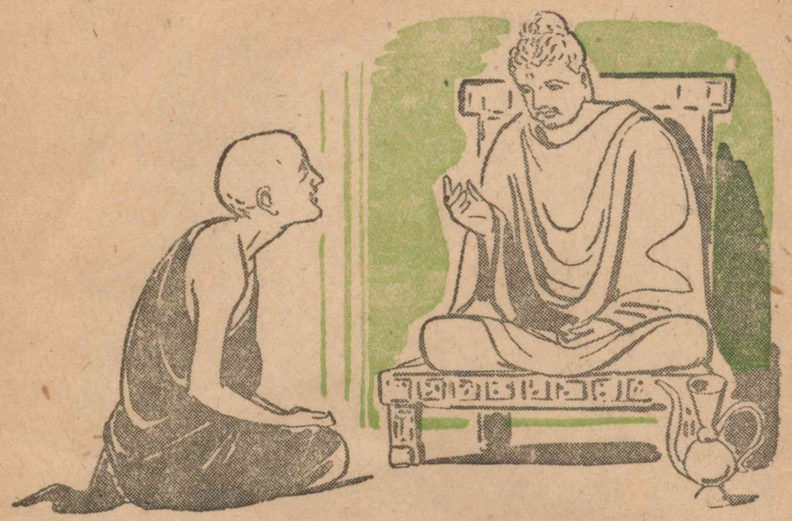
あまちゃの　中から　ひょっこりと、
おでに　なったか、おしゃかさま。

上と　下とを　ゆびさして、
お立ちに　なって　いらっしゃる。
小さな　ひしゃくで　おちゃ　く
んで、
かけて　あげましょ、おしゃかさ
ま。
ちょうも　小鳥も　たのしそう、
きょうは　あなたの　花まつり。

はんたか

おしゃかさまに　はんたかと　いう　でしが　いました。
はんたかは　ものおぼえが　わるく、そのうえ、ものが
よく　いえませんでした。
おしゃかさまは、どうかして　はんたかを　りっぱな
人に　して　やりたいと、おおもいに　なりました。
そこで、まいにち　かしこい　でしを　ひとりずつ、は
んたかの　ところへ　やって、いろいろと　ものを　おし
える　ことに　しました。

一年　たちました。けれども、なにも　おぼえません。
二年　すぎました。まだ　なにも　おぼえません。
三年に　なりました。やはり　かしこく　なりません。
おしゃかさまは、
「では、わたしが　はなしを　して　みよう。」
と　おっしゃって、はんたかを　およびに　なりました。
「はんたか、おまえは　たくさんの　ことを　おぼえなくても　よろしい。ただ　ひとことを　しっかりと　おぼえなさい。」
はんたかは、目を　かがやかせて、おしゃかさまの　お



かおを　みつめました。
「その　ひとことと　いうのは、きたない　ことばを　つかわないと　いう　ことだよ。わかったかい。」
はんたかは、この　ひとことを　心の　中に　しまいました。
そのうちに、きたない　ことばは、きたない　心から

うまれて　くる　ものだと　いう　ことが　わかりました。
きれいな　ことばは、きれいな　心から　うまれて　くる
ことも　わかりました。
「おしゃかさまの　おしえて　くださった　ことは、きれ
いな　心に　なれと　いう　ことに　ちがいない。」
と　さとりました。
ある　日、おしゃかさまは、王さまの　おまねきを　う
けました。
おしゃかさまは　たくさんの　でしを　つれて、王さま
の　ごてんに　まいりました。

はんたかも　おしゃかさまの　はちを　もって、でしの
中に　まじって　いました。ごてんの　いり口まで　きま
すと、門ばんが　はんたかを　みて、
「おまえさんのような　おろかものは、ここを　とおす
ことは　できない。」
と　いって、とおして　くれません。しかたが　ありま
せんから、はんたかは　門の　そとに　のこりました。
ごてんでは、おしゃかさまが　せきに　おつきに　なり
ました。でしたちは　その　わきに　ならびました。
その　ときです。ふしぎな　ことに、はちを　もった

手が、するすると おしゃかさまの 目の まえに のび て きました。それを みた ごてんの 人々は、びっくりして しまいました。

王さまは、

「これは ふしぎだ。だれの 手だろう。」

と おっしゃいました。

おしゃかさまは、

「これは、はんたかの 手で ございます。あれは、門の そとに いますので、この はちを わたくしに とどけようと して、手を ここまで のば

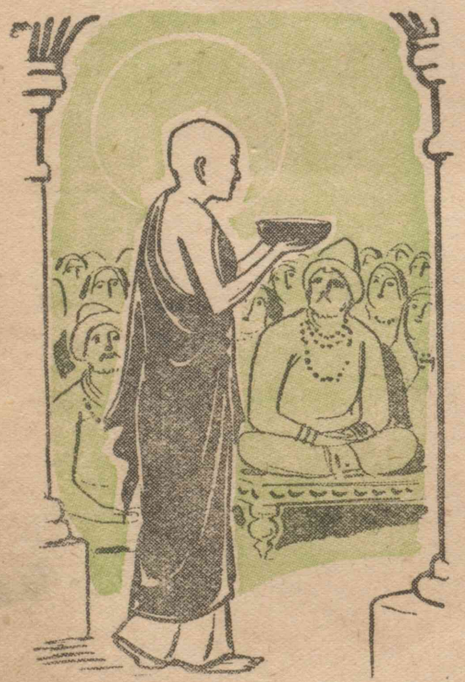
したのです。」

と おっしゃいました。

王さまは、すぐ はんたかを およびに なりました。

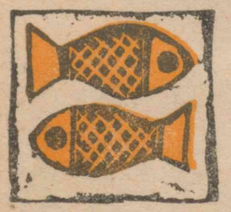
はんたかは、しずかに ごてんに あがって きました。

はんたかの からだから、きれいな 光が さして いました。



三　ことばあつめ

一くみは　花の　名を　あつめました。
二くみは　虫の　名を　あつめました。
三くみは　魚の　名を　あつめました。
四くみは　鳥の　名を　あつめました。



花の　名は　十二　あつまりました。
虫の　名は　十五　あつまりました。
魚の　名は　十三　あつまりました。
鳥の　名は　十四　あつまりました。

あつめた　ことばに　えを　かきそえました。
手わけして、その　かたちや　色を　よく　しらべることに　しました。

えを　かいて　いく　うちに、花の　名も、
鳥の　名も、だんだん　ふえて　きました。

先生が、こくばんに　つぎのような　ことを　おかきに
なりました。

「一くみの　人たちに。
『どんな　花が　すきですか。』

二くみの　人たちに。
『どんな　虫が　いい　虫と　おもいますか。』

三くみの　人たちに。
『川に　いる　魚と、海に　いる　魚とを　わけなさい。』

四くみの　人たちに。
『なき声の　わかる　ものは、その　なき声を　かきなさい。』

できあがった　ものを　うしろの　かべに　はりました。
みんな　おもしろがって　みました。

四　はやとり

むかし、ある　ところに、一本の　くすのきが　はえました。たいへんな　いきおいで、ひるも　よるも、ぐんぐんと　のびて　いきました。

なん年か　たつ　うちに、この　くすのきは、いままでみた　こども　きいた　こども　ないほど、大きな　木になりました。

とうとう、その　てっぺんは、空の　くもに　とどくように　なりました。大きな　えだは　四方に　ひろがって、

どこから　どこまで　つづいて　いるのか、わからないほどに　なりました。

まいあさ　日が　でると、この　木の　西がわの　なん十と　いう　村々が、日かげに　なります。ごごに　なると、東がわの　なん十と　いう　村々が、日かげに　なります。

「日が　あたらないで、こまった　ものだ。」

「お米が　はんぶんも　できない。」

「なんとか　ならない　ものかなあ。」

あちらの　村でも　こちらの　村でも、こう　いって、

この　大きな　木を　みあげました。

ある　ちえの　ある　おじいさんが　いいました。

「しかたが　ない。この　木を　切る　ことに　しよう。」

みんなは　びっくりして、

「こんな　大きな　木を、切って　いい　ものでしょうか。」

と　いいますと、おじいさんは、

「日の　あたるように　するには　切るより　ほかに　し

かたが　あるまい。」

と　いいました。

そこで、切る　ことに　なりました。

こんな　大きな　木の　ことですから、切るのにも　大きわぎでした。なん十人、なん百人と　いう　きこりが、切りはじめました。長い　あいだ　かかって、やっと　切りたおす　ことが　できました。

こんどは、切りたおした　木を、どう　するかと　いうことに　なりました。すると、あの　ちえの　ある　おじいさんが、

「くりぬいて、ふねを　つくるが　よい。」

と　いいました。

そこで、大ぜいの　だいくを　あつめて、ふねを　つくる　ことに　なりました。なん年か　かかって、とうとう一そうの　ふねが　できあがりました。いままで　みたことも　きいた　ことも　ない、大きな　ふねでした。

海に　うかべて、大ぜいの　せんどうが　のりこみました。そうして、「えいや、えいや。」と　こぎました。おどろいたのは、その　ふねの　早い　ことです。かいを　そろえて　ひとかき　水を　かくと、ふねは　ななつの　大なみを　のりきって、鳥の　とぶように　走るでは　ありませんか。

「なんと　いう　早い　ふねだろう。」

「ふしぎだ、ふしぎだ。」

と、せんどうたちも、みて いる 人々も いいました。

すると、あの ちえの ある おじいさんが、

「いや、ふしぎでも なんでも ない。あの いきおいの いい くすのきで つくった ふねだもの、いきおいの いいのが あたりまえさ。鳥のように 早い ふねだから、はやとりと いう 名を つけよう。」

と いいました。

その のち、はやとりは、たくさんの 米や、麦や、

まめを つんで、海を わたりました。

おかげで、日かげに なって こまって いた たくさんの 村々は、だんだん ゆたかに なって いったと いう こと です。

五　学校

「学校」と　いう　だいで、作文を　する　ことに　なりました。

「じぶんの　かきたい　ところへ　いって、そこで　かいて　いらっしゃい。」

と、先生が　おっしゃいました。

みんなは　あちらこちらに　わかれました。

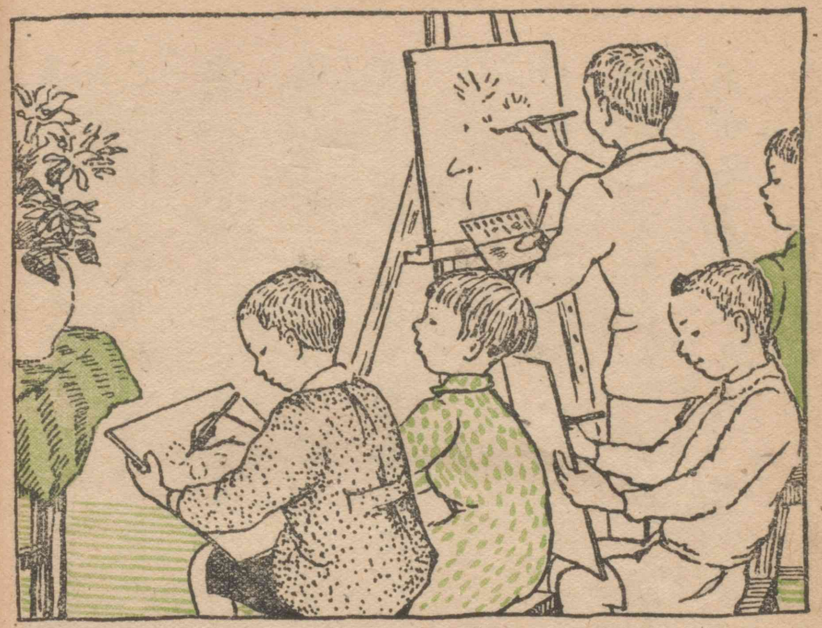
あとで、できた　作文を、ひとりびとり　よみました。

○

「ここは　ろうかです。長く　まっすぐに　なって　います。右がわは　きょうしつで、左がわには　まどが　ならんで　います。まどから　光が　さしこんで　きます。ぼうしかけが　ならんで　います。」

○

「わたくしは　かいだんを　かきます。かいだんは、はじめに　十五だん　あがって、それから　また　十五だん　あがるように　なって　います。きれいに　そうじが　して　あります。だんを　あがる　ごとに、あたりの



ようすが　かわります。
てすりは　つるつる　して
います。
あがった　ところの　かべ
には、えが　はって　あり
ます。「しずかに　あるく
こと。」と　かいて　あり
ます。」

○

「でいり口には、げたばこが

たくさん　あります。ぎょうぎ　よく　むかいあって
います。はきものが　きちんと　そろって、わたくした
ちの　かえるのを　まって　います。」

○

「びょうほんしつの　まえです。
ほそ長い　びんに、さかなが　はいって　いました。
なの花の　大きな　もけいが　ありました。青色や　ち
ゃ色の　くすりびんが、たくさん　ならんで　いました。
お米や　まめを　いれた、みほんの　まるい　びんも
ありました。へやの　すみに、かれ木が　立って　いま

した。そこに、はくせいの りすが、二ひき のって いました。ナフタリンの においが して きます。

○

「五年生の きょうしつでは、花の しゃせいを して いました。まっ白な かびんに、赤い 花が さして ありました。みんなが その まわりに あつまって、しゃせいを して いました。わたくしも、早く 大きく なって、あんな きれいな 花が かきたいと おもいました。」

「中にわに、とうもろこしが たくさん はえて います。ひまわりも のびて います。いけには、きんぎょが 三びき およいで います。白い くもが 水に うつって います。やねの ところで、すずめが ないて います。その 声が よく ひびきます。」

○

「こうさくしつでは、六年生が、はこのような ものを こしらえて いました。かんなを つかって いる 人も あります。のこぎりを ひいて いる 人も あります。かなづち

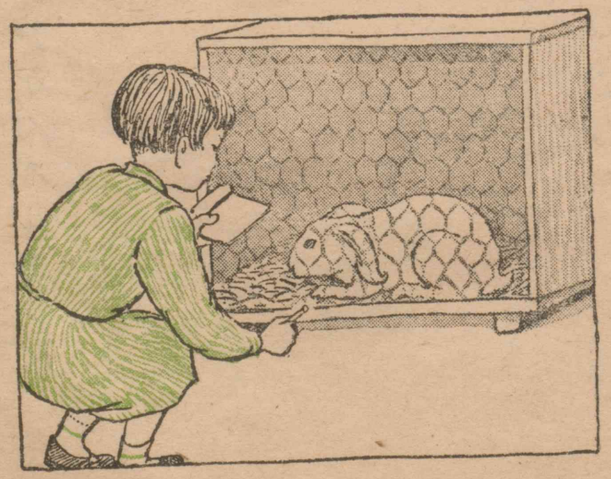
で、くぎを うって いる 人も あります。ガタガタ、トン、トン、トン、ゴシゴシゴシ、ススススス、たいへん にぎやかで いそがしそうです。」

○

「こづかいさんの おへやは あたたかです。大きな かまどが ふたつも あります。火が もえて います。おゆが わいて います。ゆげが もうもうと たって います。大きな ろに、大きな やかんが かかって います。大きな ながしも あります。こづかいさんの おへやの ものは、みんな 大きいなと おもいました。」

○

「うさぎを かって いる ところに きました。白い うさぎが、はこの 中で ねそべって います。かなあみに からだを つける ように して、ねて います。ときどき 目を ひらいて わたくしを みます。



うさぎの　目は　もも色の　かわいらしい　目です。
しょうかを　うたって　いる　声が、オルガンに　まじ
って　きこえて　きます。」

○

先生が　こくばんに、
「みんなの　学校。
みんなの　きょうしつ。
たのしい　学校に　しましょう。
きれいな　きょうしつに　しましょう。」
と　おかきに　なりました。

六　かえり道

海のような　空で、ひばりが　ないて　いました。

ぼくらは、くさはら道を
あるいて　かえりました。
ぼくが　まん中で、
右の　かたには　いちろ-
うくん、
左の　かたには　みよこ-

さん。

ぼくらは　かたを　くんで、くさはら道を　あるいて
かえりました。

きょう　ならったばかりの　しょうかを、大声で　うたいながら　あるきました。

くわばたけの　くわの　はが、
やわらかで、光って　いて、
おかいこさんで　なくても、たべたいようです。
かぜが　ふくと、

くわの　はの　においが　ぷんと　します。

「じゃあ　しっけい。」

いちろうくんが、右の　方に　まがって　いって　しまいました。

ぼくらは　ふたりに　なって、
麦の　ほと　すれすれに　あるきました。
たんぽぽの　みが、小人に　なって　とんで　いました。

「さようなら。」
みよこさんが、左の　かたから　はなれて、麦ばたけの
よこ道を　かえりました。
「さよなら　三かく、
また　きて　四かく。」
ひとりぼっちに　なって　しまいました。
ぼくは、学校どうぐを　わきに　かかえて、どんどん
走って　かえりました。

七　白うさぎ

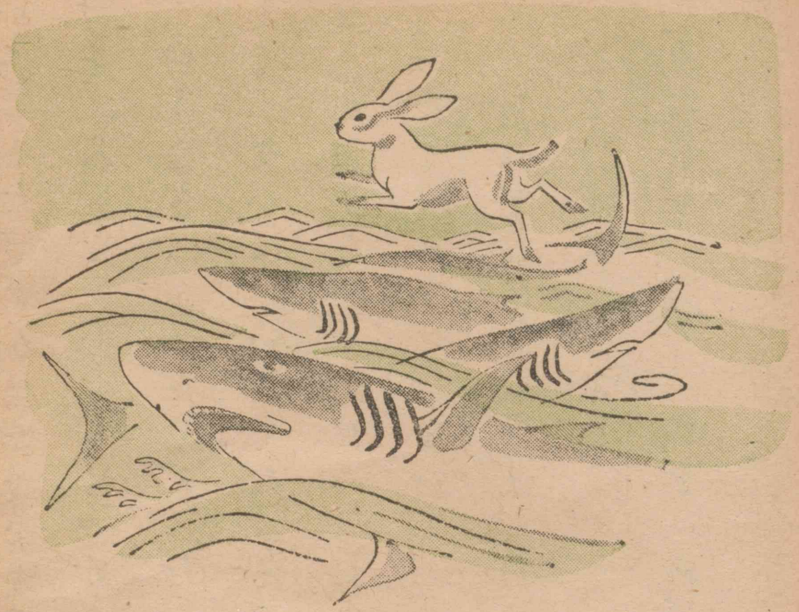
白うさぎが、島から　むこうの　りくへ　いって　みた
いと　思いました。
ある　日、はまべに　でて　みると、わにざめが　いま
したので、これは　いいと　思って、
「きみの　なかまと　ぼくの　なかまと、どっちが　多い
か、くらべて　みようでは　ないか。」
と　いいました。わにざめは、
「それは　おもしろかろう。」

と いって、すぐに なかまを 大ぜい つれて きました。白うさぎは それを みて、

「きみの なかまは ずいぶん 多いな。ぼくらの ほうが まけるかも しれない。ぼくが、きみたちの せなかの 上を、かぞえながら とんで いくから、むこうの りくまで ならんで みたまえ。」

と いいました。

わにざめは、白うさぎの いう どおりに ならびました。白うさぎは、「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ。」と かぞえながら、わたって いきました。もう ひと足で りく



へ あがろうと いう と、き、白うさぎは、

「きみたちは うまく だまされたな。ぼくは 海を わたって きたかったのだ。あはははは。」

と いって わらいました。

わにざめは それを きくと、たいそう おこりました。いちばん しまいに

いた わにざめが、白うさぎを つかまえて、からだの
けを みんな むしりとって しまいました。
白うさぎは いたくて たまりません。はまべで しく
しく ないて いました。その とき、みなりの りっぱ
な かたがたが 大ぜい おとおりに なって、
「おまえは なぜ ないて いるのか。」
と おたずねに なりました。白うさぎが いままでの
ことを はなしますと、
「それなら、海の 水を あびて、ねて いるが よい。」
と おっしゃいました。

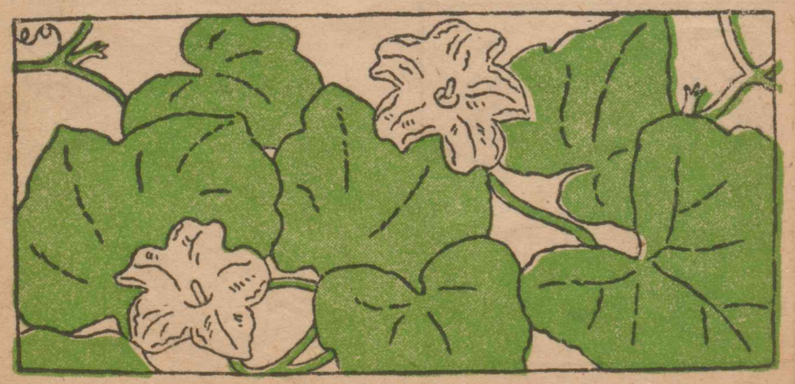
白うさぎは すぐ 海の 水を あびました。すると
いたみが いっそう ひどく
なって、とても たまらなく
なりました。
そこへ、おおくにぬしのみこ
とが いらっしゃいました。こ
の かたは、さきほど おとおり
に なった かたがたの おと
うとさんです。にいさまがたの
おもい ふくろを せおって

いらっしゃったので、おそく　おなりに　なったのです。
おおくにぬしのみことも、
「なぜ　ないて　いるのか。」
と　おたずねに　なりました。白うさぎは　いままでの
ことを　はなしました。
「それは　かわいそうだ。早く　川の　水で　からだを
あらって、がまの　ほを　しいて、その　上に　ねるが
よい。」
白うさぎが　その　とおりに　しますと、からだは　す
ぐ　もとのように　なりました。

八　高い　高い

かぼちゃの　花

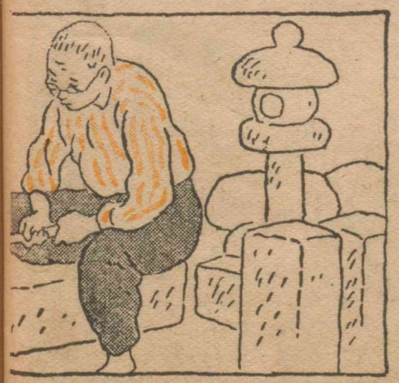
かぼちゃの　花が　さきました、
あんな　ところに　さきました。
よあけに　ぱあと　まっき色、
つゆを　ふくんで　さきました。



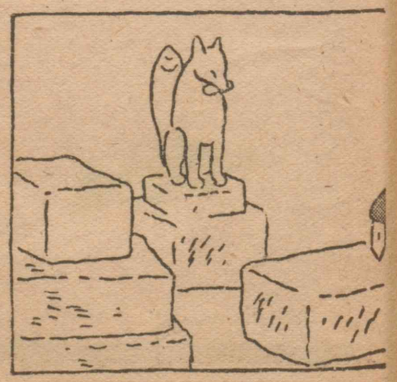
かぼちゃの　花が　さきました、
はかげに　ふたつ　さきました。
かなかなぜみも　目が　さめて、
かぜに　ゆれゆれ　さきました。

石やさん

かっちん　かっちん　石を　切る。
めがねを　かけて　石を　切る、
目もとを　すえて　石を　切る、
あせを　ながして　石を　切る。



かっちん　かっちん　石を　切る。
石より　かたい　のみの　さき、
のみより　つよい　うでさきで、
かっちん　かっちん　石を　切る。



かっちん　かっちん　日が　くれて、
火花が　みえる　のみの　さき。
のみの　手もとは　くらくても、
かっちん　かっちん　石を　切る。

高い　高い

ありは　すみれの　花に　のぼり、
「高い　高い。」と　いいました。
うぐいすは　うめの　木に　とまり、
「高い、高い。」と　いいました。
りすは　しらかばの　木に　はねて、
「高い、高い。」と　いいました。
いなかの　やねの　ぺんぺんぐさは、

「高い、高い。」と　いいました。
こどもは　石の　上に　立ち、
「高い、高い。」と　いいました。
おてんとうさまは　空に　てり、
「高い、高い。」と　いいました。

がん

がんが　かえる、
がんが　かえる、
がんが　かえる。

たすきに　ならんで、
がんが　かえる。

山が　あれた、
海が　あれた、
かぜで　あれた。

おびに　なって、
ひもに　なって、
がんが　かえる。

カナリヤ

うたを　わすれた　カナリヤは、
うしろの　山に　すてましょか。
いえ　いえ、それは　なりません。

うたを　わすれた　カナリヤは、
せどの　こやぶに　いけましょか。
いえ　いえ、それも　なりません。

うたを　わすれた　カナリヤは、
やなぎの　むちで　ぶちましょか、
いえ　いえ、それは　かわいそう。

うたを　わすれた　カナリヤは、
ぞうげの　ふねに　ぎんの　かい、
月夜の　海に　うかべれば、
わすれた　うたを　思いだす。

九　五人の　子ども

みずうみ

五人の　子どもの　うちは、おかの　上に　あるのでも、ふもとに　あるのでも　ありません。おかの　ちょうどなかほどに　あるのです。それで、おりれば　みずうみへでられますし、のぼれば　大きな　木の　ある　ところへでられます。

ある　日、みんなで　あそびに　でかけました。

「ねえ、大きな　木の　ところまで　のぼって　みよう。」

と、ジュデーが　いいます。

「いや、みずうみへ　おりよう　よ。」

と、デビッドが　いいます。

「だめよ、だめよ。」

と、ジュデーが　いいます。

「いいよ、いいよ。」

と、デビッドが　いいます。

ほかの　子どもたちは、どう　きまるか、まって　います。みんなの　心が　あわないと、どこへも　いけません。

そこへ　ちょうど、おとうさんが　おいでに　なって、

「どこへ　いこうかね。」

と　おききに　なりました。

「この　おかの　上の、大きな　木の　とこ。」

ジュデーは　こう　いいます

「みずうみ、みずうみ、この　おかの　下の。」

デビッドは　こう　いいます。

「みんなの　心が　あわないと、どこへも　いけないじゃ

ないか。」

そこで　おとうさんは　えんがわに　こしを　おろして、どう　きまるか、おまちに　なりました。ほかの　子どもたちも、こしを　おろして、まって　いました。

その　とき、マイクルが

「あのねえ、おかの　木の　ところまで　のぼってさ、それから　さっさと　かけおりて、みずうみへ　いこうよ。」

と　いいました。

「こりゃあ　うまい　かんがえだ。」

おとうさんは、そう　おっしゃって、ジュデーに　おき

きに　なりました。
「それで　いいかい。」
「はい。」
ジュデーは　いいました。
「デビッドも　それで　いいかい。」
「はい。」
デビッドは　いいました。
「みんな　それで　いいね。」
「はい。」
みんなも、声を　そろえて　へんじを　しました。

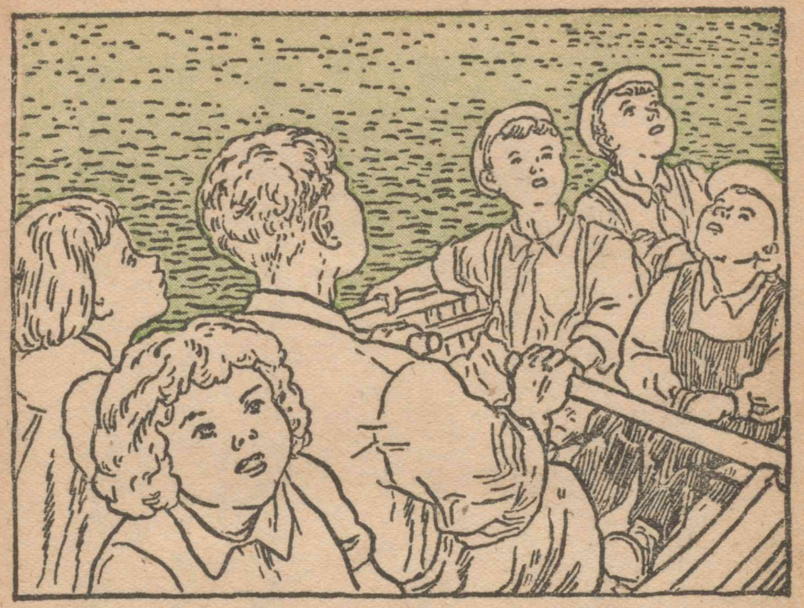
みんなの　心が　あいましたから、いっしょに　なって、おかの　大きな　木の　ところまで　のぼりました。そうして、そこで　おもしろく　あそんでから、おかを　おりて　みずうみへ　でました。
みずうみには　ボートが　うかんで　いました。みんなは　ボートに　のりこみました。三人の　男の子は、うしろに　こしかけました。ふたりの　女の子は、まえに　こしかけました。まん中には　おとうさんが　こしかけて、ボートを　おこぎに　なりました。みずうみを　右へ　いけば　もりへ　でます。左へ　いけば　たきへ　でます。

「どちらへ　いこうか。」
おとうさんは　おききに　なりました。
「右の　方。」
と、女の子たちが　いいました。
「左の　方。」
と、男の子たちが　いいました。
「りょう方　いっぺんには　いけないよ。右手と　左手を
はんたいに　こいだら、ぐるぐるまわりを　するばかり
だ。はじめに　右か　左か　どちらかへ　やらなければ。」
「右。」

と、女の子たちが　いうと、
「左。」
と、男の子たちが　いいました。
また、心が　あわなく　なりました。そこで、おとうさ
んは、ボートを　こいで、ぐるぐる　ぐるぐる　おまわり
に　なりました。もう　みんなは　どこへも　いけません。
「だって、もりへ　でたいんだもの。」
バーバラが　いいました。
「たきへ　でたいんだもの。」
マイクルが　いいました。

「心が　あわなくては　だめ、だめ。」
おとうさんは　そう　いって、また　ぐるぐるまわりを
なさいました。
その　とき、ピーターが、
「どっちへ　いったら　いいか、風に　きいて　みようよ。」
と　いいました。
「そりゃあ　うまい　かんがえだね。」
と、ジュデーが　いいました。
「それで　いいかい。」
おとうさんは　女の子たちに　おききに　なりました。

「はい。」
女の子たちは　いいました。
「それで　いいかい。」
おとうさんは　男の子たちに　おききに　なりました。
「はい。」
男の子たちも　いいました。
「じゃあ、雲を　みて　ごらん。そうして、風が　どちら
へ　ふいて　いるか、みて　ごらん。」
と、おとうさんが　おっしゃったので、みんなは　空を
みあげました。青々と　した　中に、ふんわりした、小さ



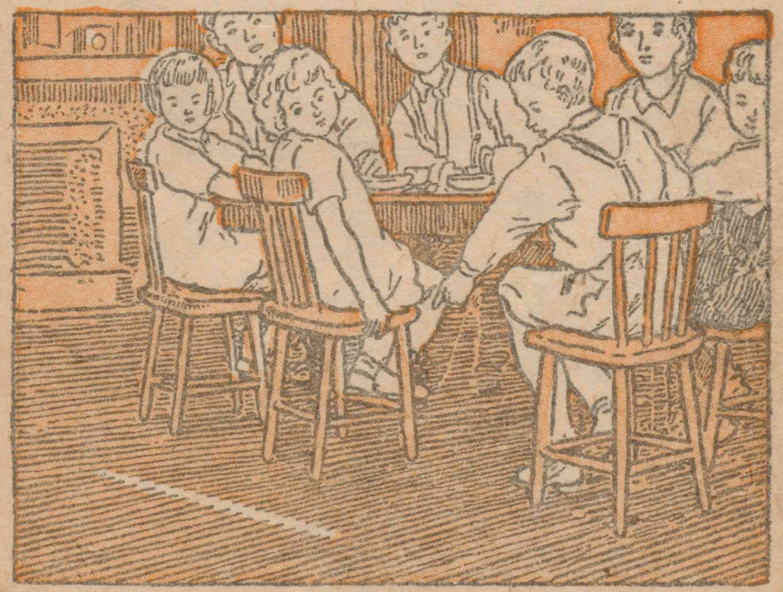
な、白い　雲が　とんで　い
ました。雲は、もりの　方へ
しずかに　しずかに　とんで
います。
「風は　なんて　いってるの。」
おとうさんが　おききに
なりました。
『もりの　方。って　いってま
す。」
バーバラが　いいました。

「もりの　方。」
みんなの　心が　あいました。
「さあ、これで　いけるぞ。」
おとうさんは　おっしゃいました。
「はじめに　もりへ　いって、それから　たきへ　でよう
ね。」
それから、みんなは　おもしろく　あそびました。

お日さま

五人の　子どもは、ゆうごはんを　たべて　いました。

その　とき、ピーターは
ふと、ゆかの　上に　なにか
あるのを　みつけました。
「あれ、あれ　ごらんよ。」
ピーターは　大声で　いいました。
ゆかの　上に、なにか、長い、光った、ぴかぴかした
ものが　あります。
「なんだか　つまんで　みよう。」



デビッドが　いいました。
「つまんで　ごらん。」
おかあさんが　おっしゃいました。
そこで、デビッドは、いすから　おりて、つまんで　みました。けれども、つまむ　ことは　できません。
「わたしが　はきだして　あげよう。」
バーバラが　いいました。
「では、はいて　ごらん。」
おかあさんが　おっしゃいました。

そこで、バーバラは、だいどころから　ほうきを　もって　きて　はきました。けれども、はきだす　こども　で　きません。やはり　ゆかに　のこって　います。

「あれ、なあに。」

マイクルが　たずねました。

「白い　ひもかしら。」

おかあさんは　おきかえしに　なりました。

「ちがうよ。」

みんなが　いいました。

「ぎんの　リボンかしら。」

と、また　おかあさんが　おききに　なりました。

「ちがうよ。」

みんなが　こたえました。

「きらきらした　水かしら。」

「ちがうよ。」

「ぴかぴかの　かみかしら。」

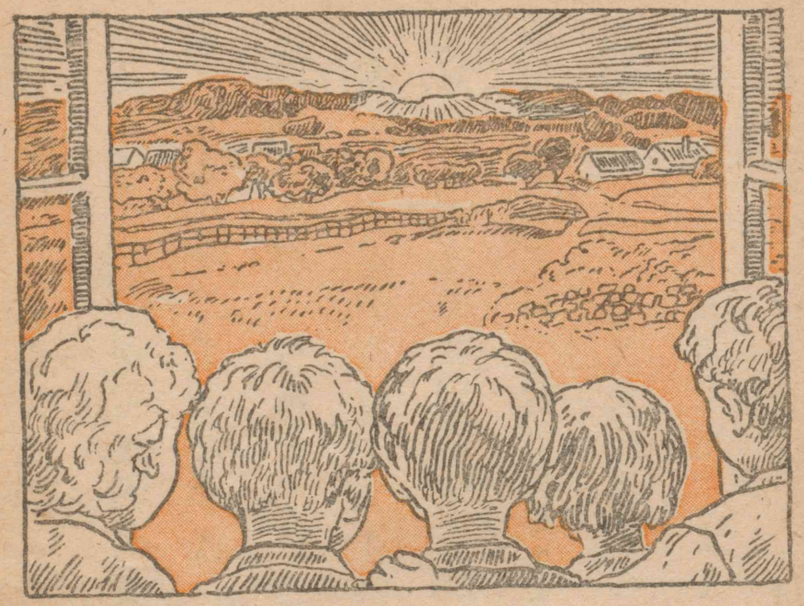
「ちがうよ。」

「お日さまの　光かしら。」

「あ、そうだ、光だ。」

はじめて　みんなが　こう　さけびました。

「これ、どこから やって きたの。」
マイクルが たずねますと、
「では、光の とおり道を さがして みましょう。」
と、おかあさんが おっしゃいました。
それで、みんなは いすを おりて、その、光の 中を
あるいて いって、まっすぐに まどぎわへ でました。
「まどから のぞいて、ごらん。あの、おかの 上を。」
おかあさんが おしえて くださいました。みんなは
そこを みました。お日さまが 光りながら、いま、おか
の かげへ しずむ ところでした。



「お日さまの 光は お日さ
まから やって きたのね。」
「ほら、どう なるか、きを
つけて みて いなさい。」
そのうちに、赤い お日さ
まは おかの かげへ しず
んで いきました。
「おや、さっきの お日さま
の 光、どこへ いったの。」
ピーターが 大声を あげ

ました。

みんなで　さがしまわりましたが、ゆかの　上には　もう　みえませんでした。

「お日さまが　つれて　いって　しまったのよ」。

おかあさんが　おっしゃいました。

「お日さまって　どこへ　いくのかなあ」。

と、デビッドが　たずねます。

「おかを　こえてね、よその　国へ　いくんですよ」。

「じゃあ、お日さまは　よその　国で　なにを　するの」。

こんどは　マイクルが　たずねました。

「よその　国の　子どもたちに　光を　あげるのですよ」。

「なぜ」。

「お日さまは　一つしか　ないから、みんなで　かわりばんこに　お日に　かかるのです。あなたたちが　ねている　あいだ、お日さまは、よその　国の　子どもが　あそべるように、光を　あげに　いくのです。それから、あさに　なって、お日さまが　あなたたちの　ところへ　かえって　くるのです。だから、だれにも　ひると　よるが　あるのです」。

「あしたの　あさも、お日さまは　きっと　かえって　き

てくれるの。」

と、デビッドが　ききますと、

「よその　子どもたちが　わたしの　お日さまを　とって　しまうのは　いや。」

と、ジュデーが　いいます。

「お日さまは　まいあさ　かえって　きますよ。だれにも　お日さまは　とられません。雲さえ　でて　いなかったら、まいあさ　あえますよ。」

にじ

五人の　子どもが、もみじの　こかげの　すなばで　あそんで　います。すなで、トンネルや、いどや、家や、道を　こしらえて　います。むちゅうで　あそんで　いましたので、だれひとり、上を　みたり　まわりを　みたりする　ひまも　ありませんでした。にわかに　パラ　パラ、パラ、ポト　ポト　ポトと、いう　おとが　きこえました。みんなは　空を　ながめました。雨でした。

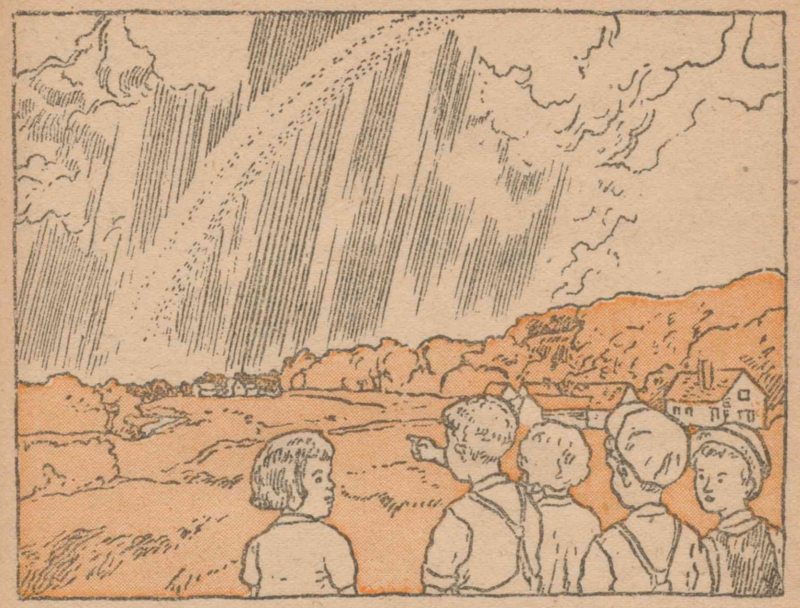
「こら、雨、あっちへ　いけ。」

バーバラが　いいました。

「だめだよ。雨に　ぼくの　いどを　いっぱいに　して

もらうんだから。」
と、デビッドが いいます。
「つまらないなあ。ぼくの
道は、雨に めちゃめちゃ
に されちゃった。」
と、マイクルが いいます。
雨は、みんなの いう こ
とには おかまいなしに、ど
んどん ふりつづけます。
みんなは とうとう え

んがわまで にげて いきました。
そのうちに、雲は、雨を つれて、空を すすんで い
きました。そこへ お日さまの 光が さしはじめました。
すると、色リボンのような にじが 空に かかりました。
「赤い 色、みえた。」
ピーターが いいました。ピーターは 赤が すきでした。
「みどり色、みえた。」
マイクルが いいました。マイクルは みどりが すき



でした。
「青い色、みえた。」
ジュデーが いいました。
ジュデーは 青が すきでした。
「わたしの もも色、みえな いわ。」
バーバラが いいました。
「き色でも いいじゃ ない か。」

デビッドが いいました。
「ぼくは だいだい色に するからね。」
その とき、おかあさんが えんがわに でて いらっしゃいました。
「あなたたち、にじが みえて。」
と おききに なりました。
「みえたよ。」
「あんな ところに だれが かけたの。」
と、マイクルが ききました。
「お日さまが、雨の つぶつぶを しゃぼんだまみたいに

光らせるのよ。」
だんだん　にじも　きえて　いきます。
ピーターは、はの　さきに　あまだれが　あるのを　みつけて、
「ごらんよ。」
と　いいました。
みんなが　みますと、その　あまだれの　中に、小さな
にじが　みえました。

十　ひびき

あさから　よるまで
こけこっこう、こけこっこう。
かあかあ、かあかあ。
ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。
ボン、ボン、ボン、ボン。
ガラガラガラ、ガラ、トン。

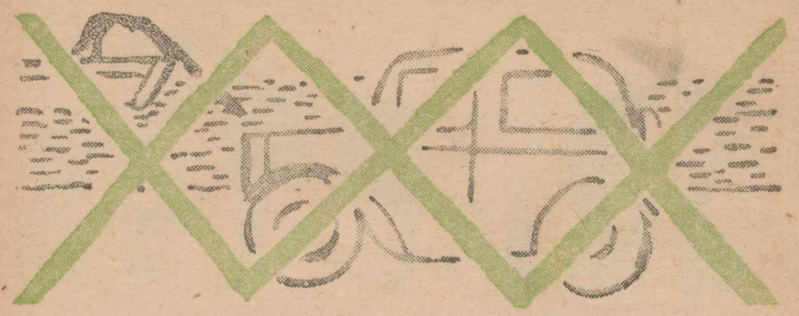
チンチン、ゴウゴウ。
ポポウ、シュシュシュシュシュ。
ブブウ、ブブウ。
ギイチラコ、ギイチラコ。

げくげくげく、げくげくげく。
さらさらさら、さらさらさら。
にゃお、にゃお、にゃお。
じいい、じいい、じいい。
カチ、カチ、カチ。

わんわん、わんわん。

まちの　音

ザザザ、ザザザ、ザザザ。
ルウウ。
リリリリリリ。
ダラッ、ダラッ、ダラッ。
パッシッセ、パッシッセ、パッシッセ。
ジュッ。
ふきあがる。



はげしく　まわる。
すべる、すべる、ながれる。
ウォン、ウォン、ウォン。
シュウ。
ガン、ガン、ガン、ガン。
ソソフ、ソソフ、ソソフ。
キイン。
こまのように　まわる。
まわって　うなる。

○

じぶんの　耳で　きいた　ひびきを、かきとって　みましょう。

ていしゃばでは、どんな　ひびきが　きこえるでしょう。

学校では、どんな　音が　するでしょう。

かいがんでは　どうでしょう。

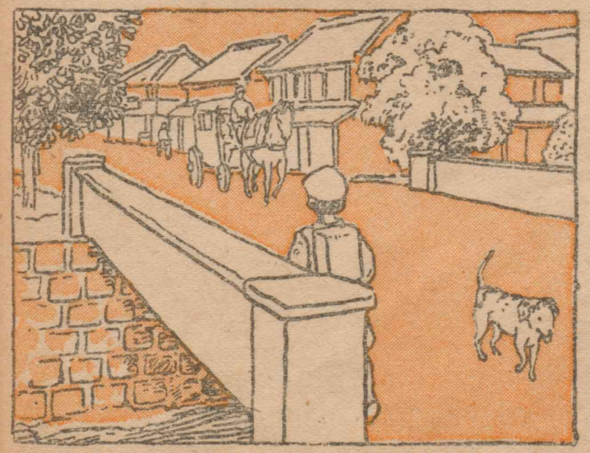
こうばでは　どうでしょう。

みなとでは　どうでしょう。

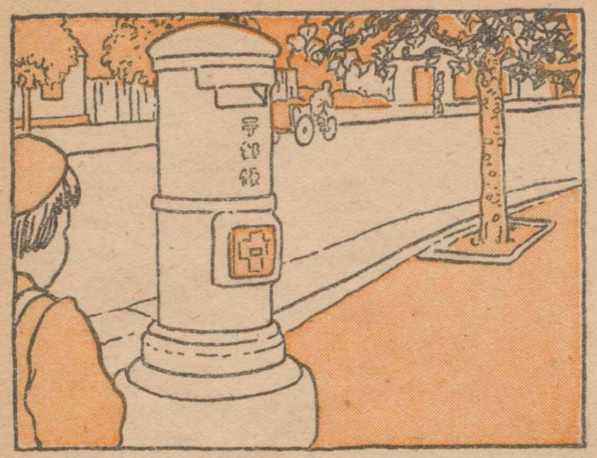
風の　日には　どんな　音。
雨の　日には　どんな　音。

十一　みんなの　もの

この　はしは　みんなの　ものです。
ばしゃも　とおります。
じどうしゃも　とおります。



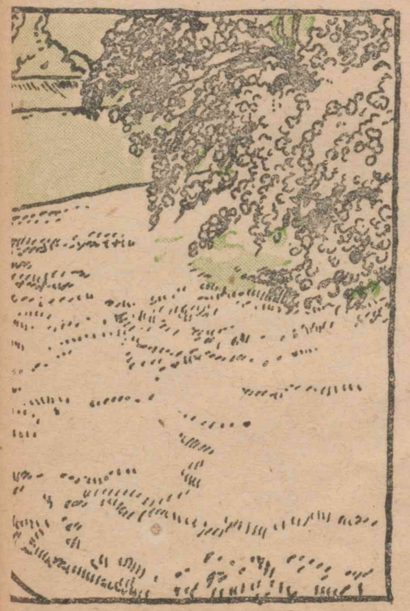
いぬも　走って　いきます。
わたくしは、学校へ　いく　ときと、かえる　ときに
ここを　とおります。



この　はしが　なかったら　どう
しましょう。
この　ポストも　みんなの　もの
です。うちの　人の　かいた　てが
みや　はがきを、ここに　いれます。
きんじょの　人たちも　この　ポ

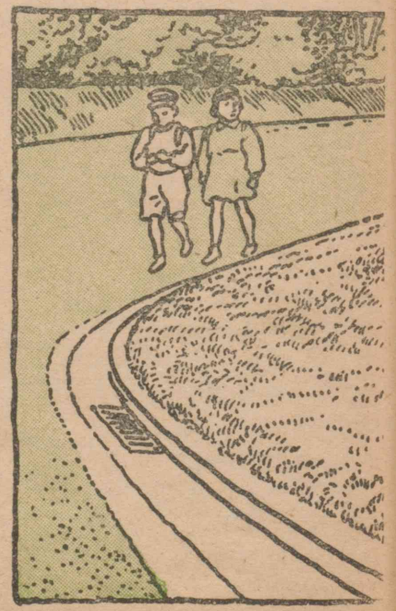
ストに いれます。
くさを ちぎって いれたり。かみきれを いれたり
する ふさな 子が いたら、とめて やりましょう。

こうえんに さいた きれいな 花は、みんなの 心を
たのしませて くれます。
「花を おらないで ください。
みに きた 人が 一本ずつ おって しまえば、
いまに みんな なくなって



てしまうでしょう。どうぞ
おらないで ください。」

このていしゃばも みんなの ものです。
このでんしゃも みんなの ものです。
ここのしばふも みんなの ものです。
やわらかな もうせんを しいたような しばふ、みど
り色に つやつやと 光った しばふ。
「よごさずに かわいがって ください。」



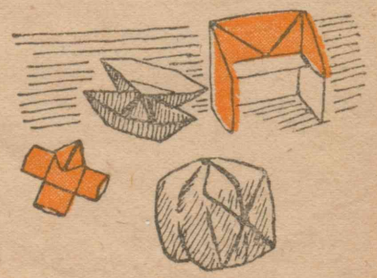
お月さまも　みんなの　もの。
あの　まっ白な　雲も　みんなの　もの。
よるの　ほしも、あさの　風も、みんなの　ものです。

十二　一まいの　紙

一まいの　紙で、いろいろな　ものを　おる　ことが
できます。
ふねを　おる　ことも　できます。ピアノや　ふくすけ

を　おる　ことも　できます。きつね
や、たましぶねや、紙ふうせんなども
おる　ことが　できます。
この　一まいの　紙が、いろいろな
かたちに　なったり、ふくれたり、立
つたり　します。

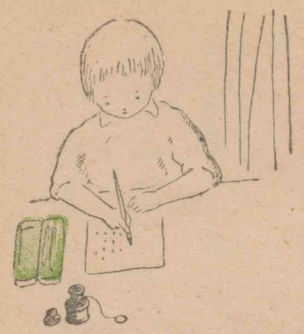
この　一まいの　紙に、えを　かく　こと
が　できます。
おとうさんの　かおも、先生の　つくえも



かく　ことが　できます。

にわの　花も、空の　雲も、とおい　山も、ちかい　家も、かく　ことが　できます。

クレヨンで　かく　ことも　できます。えんぴつで　かく　ことも、ふでで　かく　ことも　できます。



また、この　一まいの　紙に、字を　かく　ことが　できます。

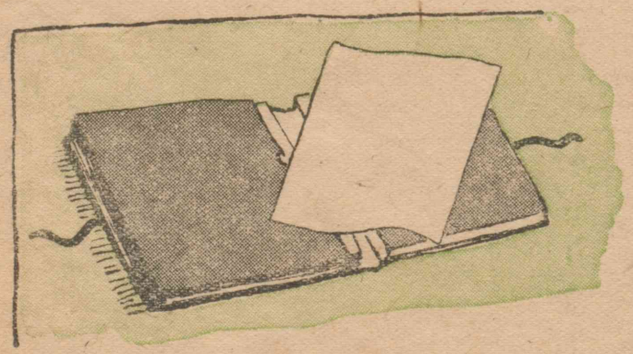
大きな　字でも、小さな　字でも、かく　ことが　できます。

はやく　かく　ことも、ゆっくり　かく　ことも　できます。

ひらがなを　かく　ことも、かたかなを　かく　ことも　できます。

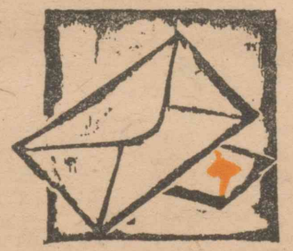
かん字を　かく　ことも　できます。ローマ字を　かく　ことも　できます。

心に　思った　ことは、いつの　まにか　きえて　しまいますが、紙に　かいた　ものは、いつまでも



のこります。

口で　はなした　ことは、そのまま　きえて　なくなりますが、紙に　かいた　おはなしは、いつまでも　のこります。



一まいの　紙に　かいた　えを、どこに　かざりましょう。

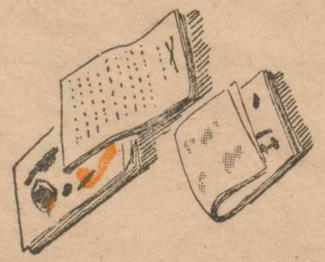
紙に　かいた　字を、どこへ　おくって　あげましょう。

どんな　とおい　ところでも、紙は、字や　えを　はこんで　くれます。

先生が、

「みなさんの　かいた　えでも、字でも、だいじに　しまって　おきなさい。みなさんが　大きく　なってから、それを　みるのは、ほんとうに　たのしい　ものですよ。」

と　おっしゃいました。



十三　かぐやひめ

むかし　ある　ところに、「たけとりの　おきな」と　いう　おじいさんが　すんで　いました。

おじいさんは、まいにち、のや　山へ　竹を　とりに　いきました。

ある　日の　ことです。おじいさんが、だれよりも　はやく　山に　いって、

「どれ、ひとしごと　しよう。」

と、竹やぶを　みまわして　いますと、ねもとの　ぴかり

と　光る　竹が　一本　ありました。ふしぎに　思って、その　竹を　切って　みますと、小さな、きれいな　おひめさまが　すわって　いました。

おじいさんは　よろこんで、

「これは　わたしに　さずかった　子に　ちがいない。」

と、てのひらに　のせて　かえりました。そうして、かごの　中に　いれて、おばあさんと　ふたりで　だいじにそだてました。

それからと　いう　ものは、おじいさんの　とる　竹の中には、たびたび　こがねが　はいって　いました。おじいさんの　うちは、だんだん　かねもちに　なりました。

また、小人のようだった　おひめさまは、三月ほどのあいだに、すくすくと　せいが　のびて、ふつうの　人の大きさに　なりました。その　うつくしさは　たとえようも　なく、家の　すみずみまで　光りかがやくほどなので、

「かぐやひめ」と　いう　名を　つけました。

おじいさんは、きもちの　わるい　ときでも、はらのたつ　ときでも、この　かぐやひめの　かおを　みると、すぐ　なおりました。

世の中の　人たちは、

「光るように　うつくしい　かぐやひめに、ひと目でも　あいたい　ものだ。」

と　いって、まいにち　まいばん　あつまって　きて、おじいさんの　家の　まわりを　とりまきました。そうして、かきねの　上から　のびあがって　みたり、へいの　すき

まから　のぞきこんだり　しました。
一どでも　かぐやひめを　みた　人たちは、
「どうかして、あんなに　きれいな　人を　およめに　もらいたい　ものだ。」
と　思って、みんな　いっしょうけんめいに　おじいさんに　たのみました。その　中には、みやさまがたも　おいでに　なりました。
けれども、かぐやひめは、
「わたくしは　だれの　ところにも　およめに　いきません。いつまでも　おじいさんと　おばあさんの　おそばに　いたいと　思います。」

と　いって、どんな　りっぱな　人の　ねがいをも、みんな　ことわって　しまいました。
たいていの　人は、あきらめて　しまいましたが、さいごまで　どうしても　あきらめない　人が、なん人か　のこりました。それで、かぐやひめは、その　人たちに　とても　むずかしい　ことを　いって、それが　できたら　およめに　いくと　いいました。
けれども　かぐやひめの　いうようには、だれも　することが　できませんでした。

かぐやひめの　ひょうばんが、だんだん　高く　なった
のを、みかどが　おききに　なって、
「それほど　きれいなのなら、ごてんに　よびたい。」
と　お思いに　なりました。それで、おじいさんに、
「もし　かぐやひめを　ごてんに　つれて　きたら、おま
えに　くらいを　さずけて　やろう。」
と　おっしゃいました。おじいさんは、かぐやひめに　こ
の　ことを　つたえて　たびたび　すすめましたが、
「どこへ　いくのも　いやで　ございます。」
と　いって、かぐやひめは　やっぱり　ききませんでした。

みかどは、おじいさんと　ごそうだんに　なって、ある
日、かりの　おかえりに、とつぜん　おたちよりに　なり
ました。
家に　はいって　ごらんに　なると、光の　中に　きれ
いな　おひめさまが　すわって　います。
「あれが　かぐやひめだな。ひょうばんよりも　ずっと
うつくしい。」
と　お思いに　なって、すぐ　ごしょに　つれて　かえろ
うと　なさいました。すると、かぐやひめの　すがたが
きゅうに　みえなく　なりました。

みかどは、びっくり なさって、
「では、つれて いくのは やめよう。」
と おっしゃいますと、かぐやひめは、また すがたを
あらわしました。みかどは、
「これは ただの にんげんでは あるまい。」
と お思いに なって、そのまま おかえりに なりました。
その のち、みかどから たびたび お手紙を くださいましたので、かぐやひめも、その たびに ごへんじを
さしあげて おりました

ある 年の 春の ころから、月の きれいな ばんになると、かぐやひめは、空を ながめては ためいきをつき、じっと かんがえこむように なりました。
あきが きて 月が うつくしく なると、かぐやひめの ようすは、いっそう かなしそうに みえました。
十五夜が ちかく なった ある 夜、かぐやひめは、
とうとう 声を たてて なきだしました。おじいさんと
おばあさんは、おどろいて、その わけを たずねました。
かぐやひめは、

「おふたりが　どんなに　おかなしみに　なるかと　思って、いままで　だまって　いましたが、ほんとうは、わたくしは　月の　世界の　ものでございます。この十五夜には、月の　国から　むかえが　きて、かえらなければ　なりません。」

と　こたえました。

この　思いがけない　ことばを　きいて、おじいさんもおばあさんも　びっくりしました。

「どうかして、かぐやひめを　月の　世界の　人に　わたさない　くふうは　あるまいか。」

と、ふたりは　いろいろ　かんがえました。あまり　しんぱいしましたので、かみの　けが　白く　なり、こしも　まがって　しまいました。

みかどが　この　ことを　おききに　なって、たいへんかわいそうに　お思いに　なりました。それで、たくさんの　けらいに　いいつけて、まもって　くださる　ことになりました。

いよいよ　十五夜に　なりました。

おじいさんの　家の　まわりは、ゆみやを　もった　人たちで、いくえにも　とりかこまれ、やねの　上まで　人

で いっぱいに なりました。

おばあさんは、しめきった くらの 中で、しっかりと かぐやひめを だいて いました。おじいさんは、その いり口で ばんを して いました。

夜中に なって、お月さまが 一どに 十も でたかと 思われるほど、あたりが あかるく なりました。

「さあ、きたぞ。」

けらいたちは、ゆみに やを つがえました。ところが、ふしぎな ことに、手足の 力が なくなって、なにを する こともできなく なって しまいました。

そのうちに、空から 大ぜいの 天人たちが、雲に のって おりて きました。すると、しめきって おいた くらの 戸が ひとりでに あきました。そうして、おばあさんが だいて いた かぐやひめの からだは、すうっと そとへ でて しまいました。もう ひきとめることも どう する こともできません。

かぐやひめは、おじいさんと おばあさんに

「いつまでも おそばに いて、こうこうを したいと 思いましたのに、ほんとうに おなごりおしゅう ございます。せめて 月夜には 月を みて わたくしの

ことを　思いだして　ください。」

と　いって、

きて　いた　うわぎを

ぬいで、おばあさん

に　わたしました。

天人が　はごろも

を　きせようと　する。

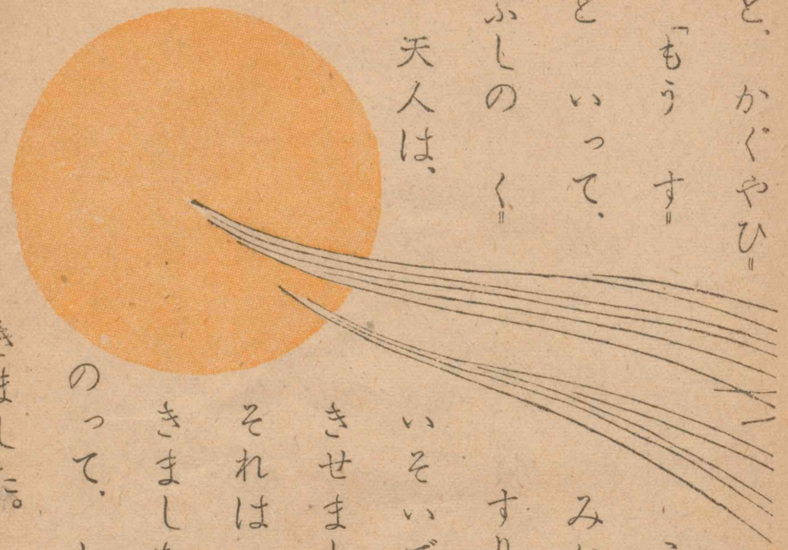
と、かぐやひめは、

「もう　すこし　おまちください。」

といって、みかどへ、おわかれの　手紙と

ふしの　くすりを　のこしました。

天人は、いそいで　かぐやひめに　はごろもを



きせました。かぐやひめの　すがたは、

それは　それは　うつくしく　かがや

きました。そこで、よういの　車に

のって、しずかに　天へ　のぼって　い

きました。

みかどは、その　のち　いつまでも、かぐやひめを　おわすれに　なる　ことが　できませんでした　そうして、ふしの　くすりと　手紙は、かえって　かなしみを　ますたねに　なるばかりでしたので、ある　とき、

「天に　いちばん　ちかい　山は　どこか。」

と、おつきの　ものに　おたずねに　なりました。

おつきの　ものは、

「ずるがに　ある　山が、いちばん　みやこにも　ちかく、天にも　ちかいそうで　ございます。」

と　もうしあげました。

みかどは、

「その　山の　上で、ふしの　くすりと　手紙を　やきすてよ。」

と　おいいつけに　なりました。

おつきの　ものは　その　とおりに　しました。

すると、ふしの　くすりを　やいた　けむりが、山の上から　いつまでも　いつまでも　たちのぼって　いました。

それで、この　山の　名を、「ふじの　山」と　いうように　なりました。

ア	カ	サ	タ	ナ
イ	キ	シ	チ	ニ
ウ	ク	ス	ツ	ヌ
エ	ケ	セ	テ	ネ
オ	コ	ソ	ト	ノ

ガ	ザ	ダ	バ
ギ	ジ	ヂ	ビ
グ	ズ	ヅ	ブ
ゲ	ゼ	デ	ベ
ゴ	ゾ	ド	ボ

パ	キャ	シャ	チャ	ニャ
ピ				
プ	キュ	シュ	チュ	ニュ
ペ				
ポ	キョ	ショ	チョ	ニョ

ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	ン
ヒ	ミ	イ	リ	ヰ	
フ	ム	ユ	ル	ウ	
ヘ	メ	エ	レ	ヱ	
ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ	

ヒャ	ミャ	リャ	ギャ	ジャ	ヂャ	ビャ	ピャ
ヒュ	ミュ	リュ	ギュ	ジュ	ヂュ	ビュ	ピュ
ヒョ	ミョ	リョ	ギョ	ジョ	ヂョ	ビョ	ピョ

こくご 小学校 第二学年前期用
Approved by Ministry of Education
(Date Oct. 14, 1949)

昭和二十二年 二月二十一日 翻刻発行
昭和二十四年 十月三十日 修正翻刻印刷
昭和二十四年十一月二十六日 修正翻刻発行
(昭和二十四年十一月二十六日 文部省検査済)

定価 金二十五円七十錢

著作者 著作兼発行者 文部省

発行者 大阪市西成区津守町五九六番地 大阪書籍株式会社 代表者 松村九兵衛

印刷者 大阪市西成区津守町五九六番地 大阪書籍株式会社工場 代表者 松村九兵衛

発行所 大阪書籍株式会社

小国 200

天 (113)	雲 (67)	島 (43)	百 (26)	門 (15)	光 (5)
戸 (113)	家 (79)	思 (43)	早 (27)	名 (18)	白 (7)
	雨 (79)	多 (43)	麦 (28)	虫 (18)	東 (8)
	音 (87)	石 (50)	作 (30)	魚 (18)	西 (8)
	紙 (94)	夜 (57)	文 (30)	海 (21)	南 (8)
	字 (96)	子 (58)	右 (31)	方 (22)	北 (8)
	世 (103)	男 (63)	左 (31)	村 (23)	鳥 (10)
	界 (110)	女 (63)	火 (36)	米 (23)	心 (13)
	力 (112)	風 (66)	道 (39)	切 (25)	王 (14)

藤原季子